

第一回がん研若手コロキウム開催報告

令和元年7月18日、学生・ポスドクの研究発表の場として「がん研若手コロキウム」を開催しました。本会では、学生・ポスドク間の質疑応答を促進させる狙いで、下記の特別ルールを設けました。挑戦的な試みでしたが、期待以上に学生・ポスドクが積極的に議論に参加し、非常に盛況な研究発表会になりました。

<がん研若手コロキウム特別ルール>

- ・会場の前方の席を学生・ポスドク用にし、教授・教員は後方の席に座る。
- ・討論時間の最初の2分間は学生・ポスドクのみが質問できる。
- ・Best Discusser 賞および Best Presenter 賞を参加者の投票で選出する。
- ・Best Discusser 賞の対象者はコロキウムに参加した学生・ポスドクの全員とする。
- ・受賞者はがん研のHPに掲載される。受賞したことをCVに書くのも可。

Best Discusser 賞には寺門侑美さんと村山貴彦さん、Best Presenter 賞には村山貴彦さんが選ばれました。

(発表者 12 名、参加者 58 名、懇親会参加者 27 名)

プログラム

1st Ganken Colloquium for Young Scientists (July 18, 2019)

13:00 - 13:10 Opening remarks

Session 1 (Chair: Kazuhiro Murakami)

13:10 - 13:25

I Ketut Gunarta

Role of JLP in ROS-induced cell death.

13:25 - 13:40

Yumiko Tahira

Engineered neurotrophic transferrin for cerebral injury.

13:40 - 13:55

Paing Linn

Pharmacologically targetable vulnerability in prostate adenocarcinoma carrying RB1-SUCLA2 deletion.

13:55 - 14:10

Ryusuke Suzuki

リソソーム局在制御における JLP の機能解析

14:10 - 14:25

Ilya V. Pyko

Glycogen synthase kinase β biology in glioblastoma stem-like cells.

Session 2 (Chair: Tatsunori Nishimura)

15:05 - 15:20

Nawaphat Jangphattananont

Distinct localization of mature HGF from its precursor form in developing and repairing stomach.

15:20 - 15:35

Yumi Terakado

Analysis of cancer stem cell and its regulatory mechanism in gastric cancer.

15:35 - 15:50

Muhammad Mamunur Rashid Mahib

Caspase-1 initiates bid-dependent apoptosis in neurons and mast cells.

Session 3 (Chair: Kohsuke Tsuchiya)

16:15 - 16:30

Yamato Tanabe

The pathological roles of BCR-ABL induced senescence.

16:30 - 16:45

Fengkai Li

Retinoblastoma inactivation induces a protumoral microenvironment via enhanced CCL2 secretion.

16:45 - 17:00

Takahiko Murayama

The replicative factor MCM10 maintains breast cancer stem like cells.

17:00 - 17:15

Zachary Wei Ern Young

Characterization of an epithelial IL23A complex.

17:15 - 17:30 Closing remarks

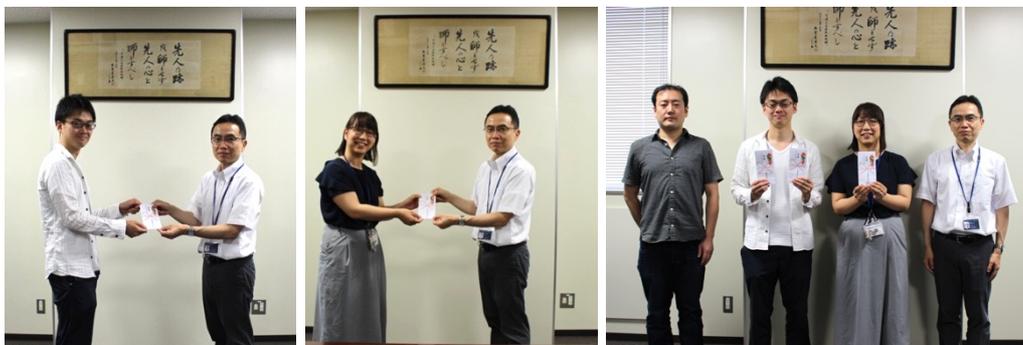
19:00- Get together



学生・ポスドクが前方に座り、教授・教員は後方。所長も最後方です。（コロキウム開始前の様子）



コロキウム終了後の懇親会では皆リラックスした表情。



Best Discusser 賞に選ばれた村山さんと寺門さん。村山さんは Best Presenter 賞も獲得。二人には副賞が贈呈されました。

所長からのコメント

今回の若手コロキウムは、以下の理由で画期的な企画だったと思います。

1. 大学院生の意識の向上

大学院生にとって、他の研究分野の学生がすばらしい発表をしたり、みんなの前で堂々と質問するのを見て、自分もいずれそうならなければならないという目標を実感できたのではないかと思います。

2. 若手同士の議論の活発化

学生、ポスドクが、発表者の近くの席にすわることで、自分が発表会の当事者であることを強く意識できたと思います。そのため、今回は若手からの質問が多く、いつもの光景と全く違っていました。今後のセミナーでは、学生も積極的に前に座ってはいかがでしょうか。

3. 英語スキルの向上

今回は、自然と英語を使う環境になったと思います。前の方に学生が座っていると、外国人比率が高まります。すると、どうしても使用言語は英語となります。必要もないのに英語を強制されるのではなく、必要だから英語を使うという環境になっていくと、英語のスキルが向上し、学会での発表や海外の研究者との交流の際ハードルが低くなると思います。

4. 教員の指導力の向上

今回のような会で大学院生がきちんとした発表ができるかどうかは、教員の指導力によります。教員の皆さんは、これをきっかけに、大学院生の指導にさらに積極的に関与してほしいと思います。それは、大学院生のためだけではなく、自分の研究力の向上に役に立つはずで、自分ひとりで研究する時代ではありません。自分の殻に閉じこもらず、他者に自分の意思をうまく伝え、共感してもらい、巻き込む努力をすることで、自分の研究が発展します。このような経験を通して、チームとして研究を牽引する力を養い、将来、独立した研究者となり成功するためのトレーニングと考えてはいかがでしょうか。

金沢大学がん進展制御研究所・所長
平尾敦

コロキウムを終えて

第一回がん研若手コロキウムの立ち上げおよび運営に携わらせていただきました。この会は、「学生・ポスドクにもがん研内で研究発表する機会を与えたい。」という平尾所長のご発案から計画がスタートし、「どうせなら若手研究者が主役の会にしたい。」という思いから、平尾所長と私がアイデアを出し合い、特殊なルールを設定させていただきました。結果的にこの狙いは的中し、学生・ポスドクからの質問がほぼ途切れず、座長はただのマイク係をしていれば済んでしまう程でした。その上、質問の質も想定以上に高く、この会は大成功であったと個人的に考えております。当事者意識を持ってのびのびとやれる環境を用意してあげれば、若い

人たちでも思わぬ力を発揮し、それがまた彼らの自信にもつながっていくという、ある意味で教育における理想的な状況が生まれうることをあらためて認識いたしました。

なぜ学会などで質問をすることが推奨されるのか、大きく二つの理由があると考えています。一つ目は、各研究の正当性（目的や仮説、方法論、得られた実験データの解釈など）について議論すること。主観的には正しいと思っても客観的にはおかしいということは珍しくはなく、科学コミュニティでは、互いに確認し合い、アイデアを出し合うことで、全体的な研究の質の向上を図っています。それ故、質問することはその一員としての大切な仕事と言えるでしょう。もう一つの理由は、「自分の顔売る」ためです。これは研究者として生きていく上で非常に重要です。例えば、求人や研究費グラントへの応募などを考えても、（業績や申請書の内容が同程度と仮定して）審査する人物にとっての「誰だかよくわからない人」と「顔が売れている人」のどちらが有利かは容易に想像できると思います。研究者はいずれ自分という看板を掲げ、個人として確立することを求められており、いつまでもボスの影に隠れていては先が見えません。学会等で良い質問をすることは自分の顔売る有効な手段の一つです。「あの質問をしたのは〇〇さんというのか」と、偉い先生も含めて聴衆は意外とよく見ているものです。優れた論文を発表することも名声を得ることにつながりますが、本人の顔が見えないままではせっかくの業績もボスばかりが評価されることになるかもしれません。一方、質問をすることで評価されるのは自分自身です。がん研若手コロキウムでは、学生・ポスドクに質問の優先権があり、彼らが質問をしやすい環境を作りました。しかしながら、通常の学会やセミナーにはそのようなルールはありません。それでも、今回、がん研の学生・ポスドクらは、「やる気になれば良い質問ができる」ことを経験しました。今後、この会で頑張った彼らが自信を持って学会等にのぞんで行くことを願っています。

本会の立ち上げ/運営において、平尾先生は教授ではなく若手PI/助教の私をオーガナイザーに任命されました。非常にやりがいのある、貴重な経験をさせていただきました。これは、学生・ポスドクに向けたものとは違った意味での「若手育成」の一環だったのではないかと受け止めております。このような素晴らしい機会を与えてくださいましたことに心より御礼申し上げます。また、加えて、座長を引き受けてくださった村上助教および西村助教、研究協力課の寺井さん、教授会の先生方、発表者の皆さん、そして全ての参加者の皆様のお力添えもあり、第一回がん研若手コロキウムは無事に終了いたしました。本当にありがとうございました。実際に開催して細かい課題点なども見えてきました。もし機会があれば、それらを改善して再び開催に関与することができれば幸いです。コロキウムが来年以降も継続されることを願いつつ、結びの言葉とさせていただきます。

がん進展制御研究所・若手PI/助教
土屋晃介

以下、シンポジウムの様子



学生・ポスドクが積極的に質疑応答に参加した。